

四旬節第二主日

2011.3.20

マタイ 17・1-9

今日の福音はイエスのご変容といわれる場面です。イエスに連れられて、高い山に登った三人の弟子たちは、それまでつき従って来たイエスのお姿が自分たちの目の前で変わり、光輝くのを目撃したのです。これがご変容と言われる出来事です。毎年、今日の四旬節第二主日には、マタイ、マルコ、ルカのそれぞれの福音書から、同じイエスのご変容の場面を朗読するよう指定されています。このような朗読箇所の指定にはどのような意味があるのでしょうか。

先週の日曜日九時半のミサで、洗礼志願者の方々をお迎えして洗礼志願式が行われました。この四旬節の間、私たちは皆、新たに洗礼の恵みに与る方々をお迎えして、私たちの信仰を新たな心で受け止め直すよう招かれています。四旬節は回心の時と言われますが、私たちにとって回心とは、何よりも私たちのカトリック信者としての信仰を新たな心で受け止め直すことです。私たちのカトリック信者としての信仰は、私たちと、私たちが信じているイエス・キリストとを結びつけるものです。私たちの信仰を新たな心で受け止めなおすためには、私たちが信じているイエス・キリストと私たちの結びつきが、私たちの中でどのようにになっているかということを見つめ直す必要があります。それが回心のための第一歩です。

そのようにして、自分のカトリック信者としての信仰を見つめ直す時、私たちは暗澹たる気持ちに陥らざるを得ないかもしれません。私たちを取り巻き、私たちに押し迫ってくる日々の生活の中で、カトリック信者としての意識をもって生きることは並大抵のことではないからです。それゆえに、自分の信仰を振り返り、自分の中のイエス・キリストとの結びつきを見つめ直すことは、私たちを居たたまれない思いにさせます。私たちにとって回心ということは、私たちが思っている以上に困難なことです。

それでも、四旬節の呼びかけに応えて、私たちの信仰における回心を心がけようとする時、今日のご変容の福音は大きな示唆と慰めを与えてくれます。私たちは自分の信仰のいたらなさを嘆く前に、私たちが信じているイエス・キリストのご変容を願うべきなのです。私たちの内におられる主イエス・キリストのご変容を願うべきなのです。

今日の福音の直前の箇所で、イエスはご自分がこれから向かおうとしておられる、殉難の死と復活への道を弟子たちに告げておられます。それを聴いた時、ペトロは「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」

と、十字架の道に進み行こうとしておられるイエスを諫めようとしたのでした。自分たちが信じて付き従って来たイエスが、人々の手にかかるて殺されるなどということは、弟子たちにとって思ってもみなかつたことだったにちがいありません。弟子たちだけには分かってもらいたいとイエスが思っておられたことが、ペトロを始めとする弟子たちには全く理解されていなかつたのです。「サタン引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」という、ペトロに向けられた厳しい叱責のおことばは、それ以上に、イエスの深い落胆と嘆きを示すおことばです。私たちもまた、イエスと結ばれた者たちでありながら、「神のことを思わず、人間のことを思っている」との、イエスの叱責のことばを浴びなければならない者たちです。そんな私たちを今日の福音は、あの三人の弟子たちとともに、イエスのご変容の場に立ち会わせようとしているのです。

人間のことではなく神のことを思うためには、神の啓示の光が必要です。イエスを包んだあのご変容のまばゆい光はそのことを示しています。その光の雲の中から父なる神のみ声が響きます。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け。」十字架の道を行かれるイエスを指し示す父なる神のみ声です。

四旬節の間、私たちは普段よりも心をこめてイエスの十字架のお姿を仰ぎ見ます。イエスの十字架が私たちに問いかけてくることを受け止めようと、イエスの十字架のお姿に心を向けています。そのような私たちに、今日の福音の父なる神のみことばは語りかけてくださいます。そして、私たちをイエスの十字架のみ後に従う者となるよう、あらためて招いてくださるのです。

あのご変容の光の中から、弟子たちに近づいてくださったイエスは、あらためて弟子たちを連れて、ご変容の山を降りて十字架の道を進まれます。弟子たちには、あのご変容の山で見たこと、聞いたことが本当に理解できたのでしょうか。あのイエスを包んだ光と、その光の中から聞こえた父なる神のみ声が指し示す、イエスの十字架の意味を受け止めることが出来たのでしょうか。私たちには、あの弟子たちよりもずっとよく、今日の福音が意味していることが理解できるはずです。私たちの回心は、今日の福音が告げていることを、私たちが正確に受け止めることが出来るかどうかに掛かっています。今日の福音が告げていることを正確に受け止めることが出来るなら、私たちの日々は、イエスを包んだご変容の光に包まれ、私たちの信仰そのものが変容を経験するはずです。私たちの日々は、父なる神のお望みに従って、父なる神の愛する子、父なる神の御心に適った者として、十字架の道を歩み通されたイエスに従う日々となつてゆくことでしょう。自分の思いではなく、人間の思いではなく、神の思

いを受け止めた者としての生き方が始まってゆくことでしょう。私たちの日々に起こる全てのことを、十字架のイエスにならって受け入れて行くこと出来る時、私たちもイエスに従う者たちとして、神の思いに応える、神の子らとされてゆくことでしょう。その十字架の道を歩み通すことによってのみ、私たちも復活のイエスの待つ、光の世界に生きることが出来るのです。

ご変容の山を体験した弟子たちが、新たにイエスの後について行ったように、私たちも十字架の道を行かれるイエスのみ後についてゆく決意を新たにしたいと思います。回心は恵みです。その恵みは、私たちが信じているイエスが、私たちの中で変容してくださることによってもたらされる恵みです。そのような恵みを願って、この四旬節の日々を生きたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高